

第34期第4回研究会「戦後初期日本におけるマス・コミュニケーション研究の再建とアジア」(メディア史研究部会企画) 終わる

日 時：2014年5月16日(金) 18:30~20:30  
場 所：立教大学池袋キャンパス 12号館地下1階第3・4会議室  
問題提起者：林 鴻亦(台湾・天主教輔仁大学)  
討 論 者：井川充雄(立教大学)  
司 会：村上聖一(日本放送協会)  
参 加 者：17名  
記録執筆者：井川充雄

第二次世界大戦における敗戦を契機に、日本の新聞研究は大きな転機を迎えた。すなわち、それまでのドイツの宣伝学の移入の歴史から、アメリカの社会心理学に基礎を置くマス・コミュニケーション研究の導入へと大きく舵をきったのである。こうした日本のマス・コミュニケーション研究についての学史的な研究は、これまでも何人かの研究者によって論じられてきたが、そのパースペクティブは、日本国内か、日本と欧米の学界との関係にとどまってきた。しかしながら、日本における戦後初期のマス・コミュニケーション研究の再建は、アジアのマス・コミュニケーションへの視点をも大きく変えるものであった。そこで、そうした視座から日本とアジアにおけるマス・コミュニケーション研究の歴史的な解明に取り組んでいる台湾・天主教輔仁大学の林鴻亦氏を問題提起者に招き、研究会を開催した。

研究会では、まず問題提起者から、戦後初期の学界において、ドイツ新聞学・宣伝学からアメリカのマス・コミュニケーション研究へ移行するなかで、どのようにアジア研究の理論的な枠組みを形成させたのかについて、発表して頂いた。それによれば、戦前から戦後にかけての新聞学、宣伝学の重鎮である小野秀雄、小山栄三らによる緒論は、戦前からの継続性が強く、特にアジア観においては、戦前の脱亜論や興亜論に近いものだった。その後、マルクス主義的な研究が一時的に隆盛を極めたが、結局は単なる産業構造を論じるためのリテラシーとされ、影響力が薄れていった。そして、アジアのメディア環境を観測する理論的な枠組みとしては、歴史学を援用する「プレス四理論」と社会心理学に近い「開発コミュニケーション論」が使われるようになっていった、とのことである。

以上の問題提起を受けて、討論者からは、南博や思想の科学研究会の果たした役割の重要性、マルクス主義的な分析がその後のカルチュラルスタディーズなどの批判的なマスコミ分析の基盤を形成したこと、日本の学界においては「開発コミュニケーション論」研究があまりさかんでない状況などについての指摘があった。

その後、フロアから質疑応答を含めた自由討論となり、活発な議論がなされた。その中では、研究史のアプローチとしての聞き取りの重要性、政策科学的な研究者としての小山栄三の評価、地域研究者によるメディア研究との関連、などについての指摘があった。また、昨今の「クールジャパン」政策など、今日における日本とアジアのメディアの連関などにも話が及んだ。全体として、こうした学説史研究の重要性を確認して、本研究会を終了した。